

三木城(釜山城, 別所城) (指定なし) (三木市上の丸町) (上の丸公園)

三木城(みきじょう)は、播磨国美囊郡三木(兵庫県三木市上の丸町)にあった城。平山城。釜山城や別所城とも呼ばれる。小寺氏の御着城、三木氏の英賀城と並び播磨三大城と称された。

概要

城跡は美囊川の南岸の台地にあり、明石の北約19キロメートル、姫路の東約31キロメートルの地にあり、それほど肥沃の土地ではなかったが、京都-有馬は古くから整備された交通の要所(湯山街道)に築城された。

天正6年(1578年)から2年(20ヵ月)に渡って、織田方の羽柴秀吉と別所長治との間で兵糧攻め、三木合戦(三木の干殺し)を含めて、激しい攻城戦が繰り広げられたことで知られている。この三木合戦の際には神吉城(印南郡)、志方城(印南郡)、淡河城(美囊郡)、高砂城(加古郡)、端谷城(明石郡)など東播磨各地の城が支城として別所方に従った。

本来の城郭は現在の三木市街地部分も含むものであったが、本丸周辺だけが上の丸公園として残っている。公園内には長治の辞世「今はただうらみもあらじ諸人のいのちにかはる我身とおもへば」の歌碑や、城外への抜け穴があったと伝えられる「かんかん井戸」、そして近年立てられた長治の像がある。公園に隣接して三木市立図書館、城郭跡の下には滑原(なめら)商店街がある。

毎年5月5日には長治を偲び、「別所公春まつり」が開催されている。

沿革

三木城の築城時期に関しては諸説あつてはっきりしない。そもそも君ヶ峰城が三木城の初見で、後に現在の地に移築されたのではないかと、という説もある。三木戦史「明応元年(1492年)九月三木ノ釜山城ヲ築キテ之二抛リ」とあるので、この地に三木城が築かれたのは、この明応元年(1492年)前後ではないかと推定される。

この地に城を築いたのは別所則治で、突然歴史上に登場する。文明15年(1483年)冬、播磨守護赤松政則が山名政豊に大敗し堺に逃亡した。その翌年、文明16年(1484年)2月に政則が家臣団により家督を廃されたが、別所則治は政則を擁して上京し、室町幕府大御所足利義政の助力を得て家督を復活させた。それ以来則治は数々の武功を挙げ政則より8郡が与えられ、その地域に三木城を築城し、別所氏は赤松氏家臣団の中で浦上氏に次ぐ実力者となったようである。

別所就治の時代になると、三木城も戦場の地となる。赤松義村と浦上村宗が内紛状態となり、享禄3年(1530年)夏に義村は柳本賢治に援軍を要請、依藤城を攻城していたが、柳本賢治が就寝中に暗殺されてしまった。それを皮切りに細川高国・浦上村宗連合軍が三木城をはじめ御着城、有田城に攻撃を開始、落城させた。この戦いが三木城の攻城戦の初見ではないかと推定される。別所就治は一旦国外に脱出したようだが、中嶋の戦い、大物崩れで浦上村宗が討取られ、細川高国も自害すると就治も三木城に戻ったようで、東播磨で大きく勢力を伸ばしていった。

その後天文7年、8年(1538年、1539年)の2度に渡って尼子詮久(後の晴久)が三木城を攻撃してきた。この時赤松氏の国人衆はほとんどが尼子軍に下り、三木城のみが東播磨の拠点となった。しかし赤松晴政は2回も国外に脱出した為、守護としての地位が落ちていったが、代わりに就治の東播磨での地位は上がり、赤松氏から細川晴元派へ与していく。

しかし、晴元を京都から追放した三好長慶に目をつけられ、有馬重則と対立していたことを口実に三好軍の攻撃を受ける事態になり、天文23年(1554年)9月、長慶の同族・三好長逸に三木城の支城7つを落城させられてしまった。ついで同年11月に、長慶は援軍として弟の三好義賢を送りこみ枝吉城を攻囲、翌天文24年(1555年)に明石氏は三好軍と和議を結び、別所就治も支えきれず和議を結んだ。ここから就治

は三好三人衆軍に組み入れられ大和まで出陣したようである(東大寺大仏殿の戦い)。その後永禄2年(1559年)には宿敵であった依藤氏を滅ぼした。

別所安治に代わった永禄11年(1568年)には三好三人衆を見限り織田信長方につく。翌永禄12年(1569年)別所安治は織田信長軍として西播磨へ攻め込んだが、逆に三好三人衆軍として、浦上宗景が三木城に來襲してきた。しかし、翌永禄13年(1570年)再び西播磨に攻め込む。また、当主が別所長治に変わり、北播磨の在田氏も滅ぼすと戦国大名化していった。

天正6年(1578年)3月7日、毛利氏攻めの先鋒を務めると信長に約した長治は突如三木城に立て籠もり、羽柴秀吉に叛旗を翻した。加古川会談で意見対立したのが原因とされているが、『日本城郭大系』ではその前に毛利輝元と筋書きが整っていたとし、毛利輝元の外交所上の勝利であると解説している。

当初織田軍は戸惑ったようであるが、三木城の城下町を焼き払い、監視する番城のみを置き、別所長治軍に組みしている城を一つ一つ攻め落としていった。翌天正7年(1579年)5月末には完全に三木城を攻囲し兵糧を断つ戦術に出た。羽柴秀吉隊は出る杭を打つというような戦術で自ら討って出る事はなく、同年2月と9月に別所長治軍は合戦を挑んできたが、いずれも敗北している。翌8年(1580年)1月6日から本格的に攻城を開始し、同1月15日に開城を勧告し、別所長治もこれに応じ一族共に自害した。長期戦となったものの、三木城への攻城戦は半月で決着がついた。

この時の詳しい合戦の様子は三木合戦も参照。

その後、羽柴秀吉は姫路城を居城とし、三木城には城代を入れた。その後天正13年(1585年)8月中川秀政が入城するが朝鮮の役で没すると、弟の中川秀成が跡を継ぎ、天正14年(1586年)には入封する。その後は豊臣氏の直轄地となり城番が入った。城番には、賀須屋内膳、福原七郎左衛門、福原右馬助、朝日右衛門大夫、青木将監、杉原伯耆守の名が歴代として伝わるが、実態ははっきりしない。ただ、豊岡城主である杉原が、三木城番を兼ねていたことは文書が残っている。

関ヶ原の戦いの結果、池田輝政が播磨52万石の大名となり、姫路城主となると、三木城も6つの支城の一つとなり、宿老の伊木忠次が3万石を知行し三木城の城主となった。その後伊木忠繁が継ぐが元和元年(1615年)一国一城令によって破却された。

伊木忠繁は国替えにより退出し、明石城の築城の際に三木城の古材も使用したと言われているが、それを裏付ける証拠は現在まで発見されていない。

城郭

三木城は堅城であるが、三木合戦以前にも幾度か落城の憂き目にあっており、その都度拡張し防備が強化され、日本有数の堅城になったと思われる。現在の三木城跡には当時をしのばせる物は非常に少ない。別所長治公400年を記念してコンクリートの塀が築かれたが、これは近世城郭の塀で、少なくとも別所長治時代の塀は土塁と塀を連携したようなものであったと思われる。また本丸の西側の崖には腰曲輪のようなものがあつたがコンクリートで固めてしまっている。

本丸

本丸の標高58.2メートル、比高は約20メートルの切崖に囲まれ、南側と北側に空堀が設けられている。ここには稲荷神社、三木市立金物資料館、保育所があり、井戸が数か所見つかっている。また本丸北側にはかんかん井戸と呼ばれている本丸井戸があり直径は3.6メートル、深さ25メートルあり、昭和初めに掘りなおされた。この井戸より別所氏が使用したと伝承されている鏡が出土し雲竜寺に保存されている。また本丸には天守台と言われる場所があるが、『三木城復元図』によるとこの場所は「矢倉」と記載されている。またこの『三木城復元図』によると、ちょうど保育園がある場所が「御殿」との記載があり、保育所建設時に礎石とみられる石列と多量の炭が出土しており、御殿跡が推察されている。またこの『三木城復元図』には御殿の横に天守と呼ばれる曲輪がある。しかしその場所は『大攻城戦』によると、少なくとも別所長治時代までは「天守は築かれていなかった」と記載している。

三木合戦

三木合戦（みきかつせん）は、天正6年3月29日（1578年5月5日）から天正8年1月17日（1580年2月2日）にかけて行われた織田氏と別所氏の合戦。織田家の武将羽柴秀吉が行った播州征伐のうちの1つで、別所氏は播磨三木城（兵庫県三木市）に籠城した。この合戦で秀吉が行った兵糧攻めは、三木の干殺し（みきのひごろし、-ほしごろし）と呼ばれる。

（※以後の日付は特に断りのない限り、すべて旧暦で記す）

合戦までの経緯

播磨と周辺的情勢

室町時代の播磨は、守護職赤松氏の領国だったが、嘉吉の乱で没落、後に再興されるものの一族や家臣の台頭を許す。室町後期の戦国時代になると、これらの勢力は半独立状態となって数郡ごとを領し割拠した。別所氏もその1つで、赤松氏の一族であり、東播磨一帯に影響力を持っていた。

周辺国では西の大国毛利氏とその幕下の宇喜多直家、畿内を制しつつある織田信長が勢力を広げており、播磨国内の諸勢力は毛利氏と織田氏の両方と友好関係を結んでいた。この2つの勢力も播磨を緩衝地帯として友好関係を保っていたが、信長に京都から追放された足利義昭や石山本願寺の顕如の要請により、毛利氏は反織田に踏み切る。

播磨国内では、天正5年（1577年）5月に中播磨の御着城主小寺政職が毛利氏と争って旗幟を鮮明にするなど、多くの勢力が織田氏寄りとなる。同年10月、羽柴秀吉が織田氏の指揮官として播磨入りし、宇喜多氏の支配下となっていた西播磨の上月城や福原城などを攻略、上月城の守備に尼子勝久を入れ、一旦は播磨のほぼ全域が織田氏の勢力下に入る。

しかし、織田・別所間の関係は同月に加古川城で行われた秀吉と別所吉親の会談（加古川評定）で生じた不和をきっかけに悪化。翌天正6年（1578年）に秀吉は中国地方攻略のため再び播磨入りするが、同年3月、吉親の甥で別所氏当主別所長治が離反し毛利氏側につく。別所氏の影響下にあった東播磨の諸勢力がこれに同調、浄土真宗の門徒を多く抱える中播磨の三木氏や西播磨の宇野氏がこれを支援し、情勢が一変する。別所氏は三木城に籠城して毛利氏の援軍を待つ方針を決定、三木合戦が開始される。

離反の理由

別所氏が離反した理由としてよく言われるのが、赤松氏の一族という別所氏の名門意識が評定での秀吉との対立を招いたというものである。これ以外にも数多くの要因があり、かつては毛利氏とも友好関係であったこと、播磨国内に浄土真宗の門徒が多かったこと、信長による所領安堵の約束への不信感、別所吉親と別所重棟兄弟の対立、姻戚関係にあった丹波の波多野氏の織田氏からの離反、上月城での処置への不信感などが挙げられる。

三木合戦

別所氏の籠城]

三木城には、東播磨一帯から約7500人が集まり籠城した。この中には、別所氏に同調した国人衆の他に、その家族や浄土真宗の門徒なども含まれており、いわゆる諸籠り（もろごもり）だった。このため多くの兵糧（食料）を必要とし、別所氏にとってはこれが重要な課題となる。合戦中、瀬戸内海の制海権を持つ毛利氏や英賀城の三木通秋などによって兵糧の海上輸送が行われた。別所氏側では、海沿いにある高砂城や魚住城などで兵糧を陸揚げ、主な支城と連携して加古川や山間の道を通って三木城に兵糧を運び込んだ。これに対し、秀吉は支城攻略の方針を採る。天正6年4月、支城の1つである野口城を落城させるが、同じ頃に毛利氏の大军が尼子勝久の上月城を包囲する。秀吉は東播磨での展開を一次中断、織田信忠を大将とした軍勢で上月城の救援に向かう。

膠着状態が続いたため、織田軍は三木城攻略を優先して書写山まで撤退、7月には毛利氏が上月城を攻略する。毛利氏の目的が上月城の奪還のみであったためか、補給路が伸びきってしまうのを避けるためか、

毛利氏はそれ以上東進しなかった。これを受けて織田軍は東播磨での活動を再開、上月城救援のために派遣した軍勢で6月から10月にかけて別所氏の主だった支城を攻略、また、三木城に対峙する平井山（三木城の北東約2km）本陣と包囲のための付城を築く。これによって別所氏は補給が困難になる。

兵糧の輸送と阻止

ところが10月、織田氏の武将荒木村重が離反し（有岡城の戦い）、毛利氏について有岡城に立てこもった。荒木村重の領国摂津は、三木城から六甲山地を挟んで南側に位置する。これによって、摂津の港で兵糧を陸揚げ花隈城から丹羽山を越え三木城へという新たな補給路ができる。秀吉の部将黒田孝高が説得に向かったが、村重に捕らえられ有岡城に幽閉された。孝高の主君小寺政職が村重に呼応したために取った処置とされる。

翌年の天正7年（1579年）2月、一応の補給路は確保されているものの、このままでは兵糧不足に陥ることは明らかで、別所氏はこの局面を打開するために秀吉の本陣平井山へ約3000人を出兵する（平井山合戦）。しかし人数、地形共に別所氏に不利な状況であり、別所長治の実弟別所治定が討死するなど別所側の敗戦となる。

5月、秀吉は摂津からの兵糧輸送の中継地点、丹生山明要寺と淡河城を攻略、これによって再び補給が困難となる。6月、反織田の共同戦線の一角、波多野秀治の八上城が明智光秀に落とされ、秀治は捕らえられて処刑された。13日、秀吉の部将竹中重治が平井山の陣中で没した。

9月、毛利氏と別所氏の双方が出兵し、兵糧を三木城に運び込むという作戦が実行される（平田合戦・大村合戦）。毛利氏の補給部隊が秀吉の部将谷衛好の平田陣地を攻略、別所氏側は三木城外の大村付近に出兵する。混戦になるが、別所側は淡河定範など多くの武将が討ち取られ敗戦となり、兵糧の搬入も失敗に終わる。

10月、毛利氏側であった宇喜多直家が離反、毛利氏の本国と播磨、摂津の間が分断され、毛利氏による支援が不可能な状況になる。織田氏は降伏勧告を行うが別所氏は拒否する。11月、共同戦線を張っていた荒木村重の有岡城が織田軍に攻略される。

天正8年（1580年）1月、三木城内の食料はすでに底をつき「三木の干殺し」状態が続いていた。これを受けて織田軍は三木城内の支城を攻略、残るは本城のみとなる。14日、城主一族の切腹によって城兵の命を助けるという条件がでる。17日、城主一族が切腹、1年10ヶ月に及ぶ籠城戦が終了する。有岡城に幽閉されていた黒田孝高は家臣に救出され秀吉と再会、一方の小寺政職は御着城を織田軍に落とされ、毛利氏の元へ落ち延びた。この後孝高は居城姫路城を秀吉に提供、姫路城は秀吉の居城となった。

Wikipediaによる

